

※発言をそのまま書き起こしたデータを基に、個人情報に関する部分を削除し、文意が通るように修正を行っています。

研究に対するコメント

谷口 武俊 氏（東京大学）

（司会） それでは後半のプログラムを始めたいと思います。後半の進行は、木村先生にお願いしてもよろしいでしょうか。

（木村） はい。皆様、お待たせしました。後半は、パネルディスカッションに近い形で進めてまいりたいと思います。

まずは「研究に対するコメント」ということで、谷口先生からお話をいただきたいと思っています。よろしくお願いいたします。

（谷口） ただいまご紹介いただきました、東京大学の政策ビジョン研究センターの谷口と申します。

まず、この後のコメントにも関わることなので、少し自分の話をしたいと思います。私も原子力がバックグラウンドなのですが、今やっているのは、広く科学技術全体に伴って、様々なリスクがあるわけですが、そのリスクを社会としてどのようにガバナンスするか、というようなことです。リスクアセスメント、リスクマネジメント、リスクコミュニケーション、そういうことをこれまでもやっていたし、今もやっているところです。

今日のお話に関係するところで言うと、実は原子力の世界で、リスクコミュニケーションが重要な活動になるんだということを電力会社の人たちにいろいろ話をしだしたのが1990年なのですが、その後誰も見向きもしてくれずに、JCOの臨界事故を迎えました。

東海村は、それまではリスクについて話すことがタブーな地域社会でした。それが、間近なところでああいう日本で初めてのことが起きて、リスクを身近に感じて、リスクコミュニケーションの重要性が少し分かってきました。ちょうどその頃、私は住民のメンタルケアとか、住民のサポートをしていましたので、正面からリスクの問題を対話しあうということがいかに重要かということ、行政など様々なところで言ったのですが、やはり2、3年すると、またリスクの問題を話すことがタブーになってくる。そういうことを東海村で見っていました。

実は2003年に、今回の研究プログラムと同じような社会実験をしていました。地域社会との対話とコラボレーション（協働）に関する社会実験を東海村で始めていました。2003年から2年半くらいやったのです。その後、それに関わった住民の方たちから、「継続的

に取り組んでほしい」という要望があつて、原子力に限らないのですけれども、健康、安全、環境に関わるリスクの問題を対話する、「シーキューブ」という NPO 法人を、住民の人と作りまして、ちょうど今年で 10 年になります。土屋智子さんという名前を聞かれたことがある方もいると思うのですけれども、彼女と一緒にやっていて、今回やっと代表の座を彼女に譲ったところですよ。そういう経緯があるということ、前置きとしてお伝えしておきます。

そういう活動の経験を踏まえて、今回のフォーラムのお話を聞いていると、まさに同じような経験だなと率直に思いました。

土田先生からは、参加者を募ったけど、少なかつたというお話がありました。我々もそうでした、村民全部にいろいろ配つたのですけど、活動に関わってくれた方は、6、7 人から始まりました。似たような規模だったと思います。

竹中さんが最後のほうにまとめられたようなことも、社会実験をしていた 2 年半の間、毎日のように実感していたことでした。

我々は、東海村で何をやっていこうかということ、ということを住民に考えてもらう、ということをやつたのです。フォーラムのテーマを参加者に決めてもらう、というのと同じです。だから、まずは人となりを知り合うということで、1 人新しい人が入ってくると、もう 1 回、全員が自分の思いを語る。そういうことを半年以上やって、住民の方がやっと決めたことが、東海村にある 17 の原子力施設を、自らの目で視察をして、安全の問題に関わって、レポートを自ら書くと。そして、それを提言すると。そういう活動をやつたのです。

住民の方の自らの意思で、発案でやつた。この手作りは大変なものだったので、それによって、端的に言うと、最終的には小さな成功体験を得ることができました。先ほど、首都圏住民の方が、「原子力の専門家の方と話すことは大変だと思つていた」とおっしゃっていましたが、同様のことは東海村にも当てはまります。東海村の事業所には、村民がたくさん関わつてはいるのですけど、しかし、一般住民が事業所に物申すということは、できないと思つていたのです。それが、話し合いをやりながら、「我々の目から見ると、ここに問題点があるように見える」というようなことを書いて、提出し、議論を重ねていくと、相手の事業者が少しずつ変わつて、対策を取るようになってきた。そういう事例がいくつか出てきた。そういう小さな成功体験、何かと一緒にやると、何かが変わるんだという意識を共有できたのですが、この活動も、最終的にはそういうことに結びついていけばいいのではないかと聞いていて思いました。

思つたことをとりとめなく言つていきたいと思つています。

この研究は、「原子カムの境界を越えるため」ということで、タイトルがキャッチーだったので。このプロジェクトが採択されたのは、おそらくネーミングがよかつたの

だろうと思います。

私は、原子力の組織文化の研究を長い間やっていたことがあります。日本は、明治の初期にヨーロッパから「社会」という言葉が入ってきたわけですが、それまでは「世間」という言葉を使っていました。「世間」というと、英語だったらパブリックだったり、ピープルだったり、いろいろあるのですけれども、私はそういうことに関心があって、いくつか本を読んだことがあります。

「原子カムラ」という言葉があるので、私なりに思っていることを話したいと思います。我々は、人から指摘されて初めて、自分がいかに世間体に囚われていたのかということに気づく。こういうことはよく言いますよね。普段は意識していない。でも、何か行動を起こさないといけないときに、世間体みたいなことが意識される。ですから、おそらく専門家も、コミュニケーションとか、何かをやらなければいけないと思ったときに、ふと、日頃思っていない世間体というものを頭の中に意識するのだろうなと思っています。

そして、世間体に囚われている人の頭の中には、おそらく、世間体を満足するような仮想的な人間像があって、自分の行動がそこから逸脱するかどうか、ということに気になっている。世間並みということが大変気にする日本社会の中で、そういうことをいろいろ考えるのだろうと思います。

そういう面では、先ほど、首都圏住民の方が、「原子力に携わって、OBになられた方が、意外と批判的なことを言う」とおっしゃっていましたが、それはその人の「世間」が、リタイヤすることで少し変わったのだろうと思います。

ですから、ここにおられる方も、世間体とか世間と言ったときにイメージされるものが、1人1人相当違うのだろうなと思います。どんな人でも、地域社会や学校、職場など、様々なレベルの集団に入っているわけです。それも重層的に、いくつにも所属しています。でも、同じ集団にいても、そのメンバーそれぞれが、自分の集団だと感じる程度はそれぞれ違うと思います。それは、社会心理学をやっている土田先生たちの世界で言うところの「準拠集団」、自分の態度や行動の拠り所になっている基準に違いがあるわけです。自分が心理的に関係づけているような集団があるわけですね。だから、その準拠集団と言われるものをよくよく考える必要があると思います。

この研究でも「ムラ」という言葉を使っているけれども、何か1つの「ムラ」というものがあるようなイメージではなくて、様々な人が様々なところに所属しながら、その人がそれぞれ心理的に関係づけている集団というものも多様にあるのだろうと私は思って、今この話を聞いていました。

「世間」を区別するのは、この研究で言っているような内と外という概念。あるいは、それに関連して、「原子力は仲間内」というような概念がこういう問題には絡んでいますし。それから、本音と建前との使い分けというようなことも、こういう問題に深く絡んでいるのだろうなと思っています。

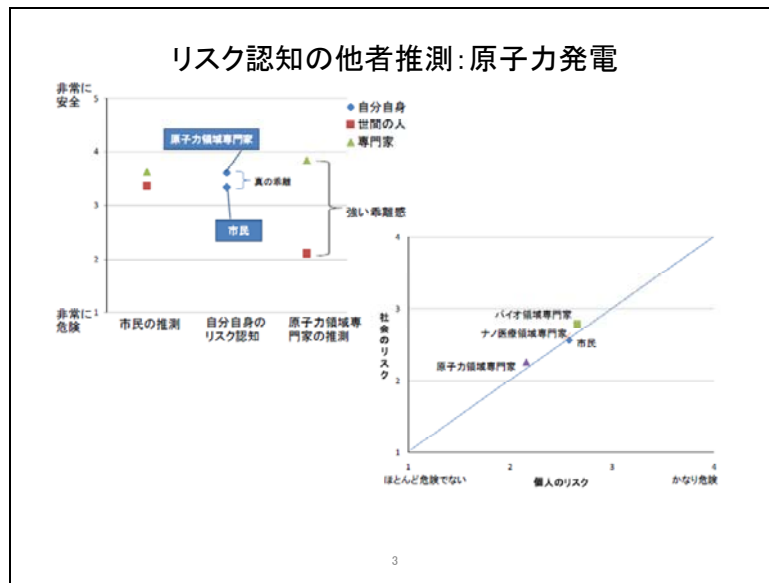
それから、この研究では「越えるため」と言っているのです、それに関しても一言申し上げたいと思います。

私がそうだなと思ったのは、会田雄次の言葉です。世間体の議論をすると、世間体を気にすることはあまり良くないんだ、とよく言われるけれども、彼は、世間体を気にするのは日本人の基底的感情であり、世間体を飾ることを否定する必要なんてないんだと言っています。むしろ、積極的に肯定して、それによって我々の倫理を高めていく道を選ぶべきだという話をしています。

彼が言うには、「世間」という字の「間」というのは、「空間」の問題だということで、毎日自分が接触している社会だけを「世間」とは考えてはいけないと。価値観を異にする集団はたくさん存在しているということをはっきりと自覚すること。そういう意味で、世間をもう少し広く意識するようにと言っています。まさにこれが、この研究でも同じように言われていることなのだろうと思います。

もうひとつは、「世間」という字の「世」です。これは「時間」の問題だということで、自分の面子を維持する時間です。これを、瞬間的な短時間だと思っはいけないと彼は言っています。永遠にとは言わないけれども、自分が生きている間ぐらひは、という長い意味でそれを維持するということが重要なんだ、と言っています。

これを原子力の人に問いかけるとすれば、どういう「世間」を頭の中に描いているのか、もう少し広く捉えたらいいのではないかと私自身は思っています。それは、「ムラ」の結束が、「ムラびと」が広い世間に触れれば触れるほど弱まっていくということ。それは、様々な問題が表面化してくるからですが、そういう話があるように、広い世界、世間と接触していくことがやはり重要なんだなど、こういうプロジェクトを横で見ながら、実感しているところです。



あとは、土田先生からご紹介いただいた原子力学会のアンケートに関わる話として、我々が2000年過ぎにやっていた研究について、少しご紹介したいと思います。

コミュニケーションがうまくいくかいかないかというのは、双方の問題であります。お互いに相手のことを知っていれば、コミュニケーションは当然成り立ちやすいという意味で、どれくらい正確に相手のことを思っているのだろうか、という研究をやったことがあります。

原子力とか、遺伝子組み換え食物とか、いろいろな対象に対して調査を行なったのですが、このスライドは、原子力の安全性について聞いているものです。一般市民の人に、自分自身がどう思っているのかということと、自分の周りの一般市民、それから原子力の専門家は、どれくらいだと思っていると思いますかということ聞いています。この二者はそんなに違ってないわけです。

同様に、原子力の専門家にも聞いてみました。原子力の専門家自身が、一般の人より安全だと思っているのは当然なのですが、一般の人はどう思っていると思いますか、と聞いていて、他者を推測させると、彼らは、「一般市民は大変危険だと思っているに違いない」と思っているわけです。非常にギャップが大きい。そもそも専門家と一般の人との間では、知識量や情報環境に違いがあるわけですから、ギャップはあります。でも、それ以上の「思い込み」みたいなものが観察されています。実は2003年頃の研究でも、こういうデータが出ています。

その頃から、余分に持っている「思い込み」みたいなギャップを、どうやって減らせばいいのだろうか、という思いがあったのです。一緒になることはないし、一緒になることが正しいわけでもありません。でも、余分に持っているギャップはどうやって減らすのだ

ろうか、という思いはありました。そういう意味では、この研究と同じような問題意識を2000年過ぎくらいからずっと持ち続けていて、そういう思いの中で、我々は先ほど言った活動をやってきたということです。

皆さん苦勞されているように、本当に大変なのです。そんなに簡単じゃない、ということは、やってみるとよく分かると思います。だから、コメントは、「頑張って下さい」としか言いようがないのですけれども。

ただ、思うのは、これは研究ですから仕方がないのですが、ある意味で統制されたフィールドでやっているわけです。これが、統制がないフィールドでやらなければいけなくなったとき、例えば、現実的に社会的な問題になっているようなところに行ってやらなければいけないときには、おそらく多くの困難を感じるだろうと思います。

東海村でNPO活動を続けてまいりましたが、その活動には様々なパターンがありました。行政と一緒にやらなければいけないこともあるわけですし、行政に専門家が入る場合など、様々なパターンがあります。

このフォーラムは原子力の知識を持った専門家と市民という枠組みですが、ここに行政が入ると、また非常に難しくなるでしょう。それから、原子力学会員の方に原子力の専門家として関わってもらっていますが、彼らが組織を背負って出てくるとなると、おそらくまた変わるでしょう。

というのが現実なので、そういうことを今後どのように次のステップの中で考えていくのかということについては大変興味があるし、ぜひそこにチャレンジしていただきたいと思っています。

少し長くなりましたが、思いつくところを述べさせていただきました。

(木村) 谷口先生、どうもありがとうございます。

パネリストの方で、谷口先生に聞いておきたいことがあれば、今お聞きしていただければと思いますけれども、いかがですか？

では、私からひとつお聞きしてよろしいでしょうか。先ほどの東海村のシーキューブの事例でもそうだと思うのですが、対話をしていって、そこで信頼感や人となりを理解した上で次のステップに行くというのは、とても時間がかかることだと思うのです。今回のフォーラムでは、テーマの選定がとても難しかったのですが、どのような話題であれば、こういうことがスムーズにできるのか。そういうことは果たしてあるのか、ないのか、ということについて、もしお考えがあればお聞きしたいと思うのですが、いかがでしょうか？

(谷口) 我々が東海村でいわゆる社会実験研究を始めたときに、先ほども言ったように、6、7人の方が関わってくれました。そのときには、今日もそういう話がありましたが、「なぜ私はここに関わったのか」ということについて、何回も何回も話し合っていました。東

海村は、ご存知のように、村民の3分の1が何らかの形で原子力に関わっています。全然関わっていなかった人も入ってきたし、例えば日立製作所で原子力をやっていた人も入ってきました。女性もいましたし、子育てをしている人もいました。いろいろな人がいましたね。そういう中で、何を思って入ってきたのかということについて話し合う。とにかく何回も何回も、新しい人が入る度にやったりして行って、本当に共通項になるものは一体何かということ、皆が何となく感じていったのだと思います。

そういう面で、苦労したのはファシリテーションです。ファシリテーターというのは、司会進行役でも何でもないということはもう皆さんよく分かっていると思います。場を作ったり。東海村の住民といっても、初めて会う人もいるわけです。その人たちをつないだり。そうやって、いわゆる触媒の役を果たすわけです。ですから、問いかけの仕方とか、そういうことに大変苦労しました。今日もお話があったように、ファシリテーターが、参加者からどのように見られるのか。そういうことも、我々も同じような経験をしています。

それで、参加してくれた人たちが、何をしたいと思うか、というところを徹底的に議論して、最後に、「やはり自分たちの目で施設を見て、何か言えることはないか、という活動をしたい」というところにたどり着きました。やはり、そこまで思って取り組んだ活動だったので、長続きをしたのだと思うし、これを継続的にやりたいということでNPO活動になって、NPO活動のコアのプログラムになってきたというところがあるので、そういうことだろうと思います。

そういう意味では、問いかけをするだけではなくて、意見を発散させて、意見を収束させていくというファシリテーターのスキルというのは、やはり大変大きいです。これは、スキルなのです。だから、徹底して訓練をする必要があると私は思っています。

あと、ファシリテーターの持つべき要件のひとつとして、やはり多様な人が入ってくるわけですから、原子力問題の抱えている問題の広がり、スペクトルというのでしょうか、これが広いんだということ、ファシリテーター自らが知っていないといけません。そういう意味では、極端に言うと、誰にでもなれるわけではないだろうとは思いますが、だから訓練する必要があります。

ただ、1回ファシリテーターを経験してみると、良いことは間違いありません。私は大学でリスクコミュニケーションのロールプレイングを10年ほど前からやっていますけれども、面白いと言う学生は、ファシリテーターをした人です。ファシリテーションの仕方によって、答えが違う、結論が違うということを実感すると、もう一度やりたくなる。そういう意味では、アクティブリスニングの訓練にもなるし、大変いいことだと思います。

少し余計なことも言いましたが、そういうことです。

(木村) ありがとうございます。ファシリテーションの話が出ましたが、鬼沢さん、何かお聞きしたいことはありますか？

(鬼沢) ファシリテーターは、回数を重ねることでスキルアップできるのでしょうか？
それとも、やはりある程度の基本的なことを学びながら、常に行きつ戻りつしながら、いろいろな人のファシリテーションを見ながら学んでいくことのほうが大切なのでしょうか？

(谷口) 場数を踏むことは重要だと思います。ただ、それだけではないだろうと思います。

問いかけの仕方もそうですけれども、今回のフォーラムのように、アイスブレイキングに始まって、ブレインストーミングをうまくリードしながら、深い議論を引き出していくこと。あるいは、意見の発散と収束をやっていくのもそうですし。いろいろな手法を使っていかないといけない。ブレインストーミングもそうですけれども、KJ法とか、ストラクチャード・ラウンドとか、いろいろなやり方があります。そういうことについて、知識をしっかり持って、実際にやれるスキルを持つには、訓練が必要だと思います。

プロの人もいますし、そういう訓練を受けてみる機会があれば、受けてみてはいかがでしょうか。

(木村) ありがとうございます。

他に谷口先生に聞いておきたいことがある方はいらっしゃいますか？ よろしいですか。

それでは、次のプログラムに進みたいと思います。谷口先生、どうもありがとうございました。